

国の豊かさの性質とその原因についての検討
An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth
of Nations.

アダム・スミス著 翻訳: 山形浩生^{*1}

2003年9月21日

^{*1} ©1999-2003 山形浩生 本翻訳は、この著作権表示を残す限りにおいて、訳者および著者に一切断ることなく、商業利用を含むあらゆる形で自由に利用・複製が認められる。プロジェクト杉田玄白正式参加。 <http://www.genpaku.org/>

目次

序文と、この本の構想	i
第I部 労働の生産力向上の原因と、その生産物がいろいろな階級の 人々に自然に分配される秩序について	1
第1章 分業について	3
訳者あとがき	7
はじめに	7
題名と翻訳について	7

序文と、この本の構想

それぞれの国での毎年の労働は、そこで毎年消費される必需品や、生活上の便利なものを供給する源だ。そしてその必需品や生活上の便利なものは必ず、その労働から直接産み出されるものと、そうやって産み出したものを使ってほかの国から買うものとで構成される。

だからこういう産物やそれを使って買う物が、それを消費する人間の数に比べて大きい小さいかに応じて、その国のすべての必需品や、ときどき欲しくなる生活上の便利なものが、十分に供給されるか不足するかも決まってくる。

でも、この比率はどの国でも、2つのちがった条件によって制限されてくる。まずはその労働が全体としてどれだけ上手に使われるか、どれだけ柔軟に使われるか、どれだけきちんと考えて使われるか、といったことだ。そしてもう一つは、役に立つ労働で雇われている人数と、雇われていない人数との比率だ。それぞれの国の土壌、気候、領土の広がりなどがどうであろうとも、その年間供給の豊かさや枯渇ぶりは、それぞれの場合におけるこの2つの条件によってくる。

この供給がたっぷりあるか、カツカツかという問題は、この2条件の中でも後者よりは前者に左右されるほうが大きいようだ。狩猟や漁業を中心とする野蛮な国では、働ける個人はすべて、おおむね役に立つ労働のために雇われていて、生活上で必要なものや便利なものを、自分自身のためか、さもなければ老いすぎるか幼すぎるかして、狩猟や漁業にいけない家族や部族の者たちのために、精一杯供給しようとする。でもこういう国は、悲惨なほどまずしいから、しばしば物資の不足だけのために自分たちの幼児や老人や長期の病人を直接殺害するか、あるいは遺棄しなければならないところまで追いつめられる（またはそう自分では考える）。飢え死にさせたり、野獣に喰われるに任せたりするわけだ。

逆に文明化されて栄えている国では、多数の人はぜんぜん働かないけれど、その多くは働く人々の大部分に比べて、10倍、いやしばしば100倍もの労働の産物を消費する人々だったりする。それでも社会全体としての労働の総産物はきわめて大きいので、全員に供給がたっぷりいきわたり、労働者は一番階級が低く貧困な者であっても、儉約して生産的な者ならば、どんな野蛮人であっても手に入れられないほどの、生活必需品や生活上の便

利なもの分け前を享受できることが多い。

この労働の生産力という点での向上と、その生産物が社会の様々な階級や状態の人々に自然に分配される秩序というのが、この検討における第一巻の主題となる。

ある国で実際に労働力がどれだけ上手に、柔軟に、考えて使われているにせよ、その状態が続いているときには、その国での年間供給が多いか少ないかは、その年に有用な労働に雇われた人数と雇われなかった人数との比率に依存するしかない。有用で生産的な労働者の数は、後に示すように、どこでもそういう労働を働かせるための資本ストックの量に比例する。だから第二巻は、資本ストックの性質をとりあげる。資本ストックがどのようにしてだんだん蓄積されるか、そしてその利用方法のちがいに応じた、使役する労働量のちがいについてもとりあげる。

労働の使いかたのうまさ、柔軟さ、判断力などがそこそこ先進的な諸国でも、その一般的なやりかたや方向性の面で、とても異なった考え方をとっている。そして各国の産物の量から見て、そうした考え方がすべて同等の成果を挙げているとは言えない。ある国の政策は、地方部の産業を大幅に奨励してきた。別の国の政策は、都市部の産業を大いに奨励してきている。あらゆる種類の産業を平等かつ無差別に扱ってきた国は、ほとんどない。ローマ帝国の崩壊以来、ヨーロッパの政策は、地方部の産業である農業よりも、工芸、製造業、商業など都市部の産業を重視してきた。この政策を導入して確立させることになったと思われる状況については、第三巻で述べてある。

こうしたいろいろな考え方は、たぶん特定の人々の個人的な利害や偏見に基づいて導入されたものだ。それが社会全体の一般的な福祉にどんな影響を持つかなんて、まったく無視され、予測しようとするされなかつただろう。だがそれは大きく異なった政治経済理論へとつながった。そしてその政治経済理論のうち、一部は都市部で行われる産業の重要性を強調し、あるものは地方部での産業の重要性を強調する。こうした理論は、学者の見解のみならず、君主や独立国の公共運営に対しても大きな影響力を持ってきた。第四巻でわたしは、こうしたさまざまな理論をできるだけ十分かつ明確に説明し、それが様々な時代や国々に与えた主要な影響についても解説しようとしている。

人々の集団としての収入がどうなっていたか、あるいはいろいろな時代や国において、そうした人々の年間消費分を供給した資金の性質を説明するのが、最初の4巻の目的だ。第五巻と六巻は独立国または連邦の歳入を扱う。この巻では、まず独立国ないし連邦で必要な歳出とは何かを示そうとしている。その歳出のうち、社会全体からの一般的な貢献によってまかなわれるべきなのはどれか、ごく一部の団体のみがまかなうべきなのはどれか、あるいは社会のごく少数のメンバーのみが負担すべきなのはどれかを示そうとした。第二に、社会全体が負担すべき支出を、社会全体から徴収する時に使えるさまざまな手法

を示し、それぞれの手法の主要なメリットと欠点を示している。最後の第三点としては、現代の政府はほとんどすべて、こうした歳入の一部を債務返済にあてたり、借入れを行ったりしているが、その理由は何かを示している。そしてそうした債務が、真の豊かさ、つまり社会の土地と労働の年間産物に対してどんな影響を持っているかを示している。

第I部

労働の生産力向上の原因と、その生産物がいろいろな階級の人々に自然に分配される秩序について

第1章

分業について

労働の生産力や、それをどの方向にせよ導く上手さ、柔軟さ、判断力などのかなりの面で、いちばん大きな向上をもたらしたのは、分業の効果のようだ。

社会一般での分業の効果は、具体的な製造業でそれがどう機能するかを考えればわかりやすい。分業はいちばんつまらない産業において、いちばん徹底的に活用されていると一般に思われている。たぶん、実際にはつまらない産業でそれが他の産業よりも大きく導入されているというわけではないのだろう。でもそういう、ごく少数の人々の小さな要求を供給するよう運命づけられた小製造業者では、作業員の総数はどうしても小さくなる。そして作業の各種部分で雇用されている人々が、みんな同じ作業所の中に集められることも多く、見るものがそれを一望に収めることができる。ところがこれが大製造業者となると、仕事で雇われる作業員があまりに多いので、それを同じ作業所に集めるのは不可能だ。一度に見られるのが、一つの作業部門の人員を超えることはほとんどない。つまりこうした製造業者でも、仕事は本当はもっと慎ましい製造業者よりたくさんの部分に区分されているのかもしれないけれど、その別れ方がはっきりとは見えず、したがってあまり認知されてこなかったのだろう。

だからとても小さな製造業者を例にとろう。でも例にとる製造業者は、分業が非常にしばしば認識されてきた業者、ピン製造業者だ。この業界（分業のおかげで確固たる産業となっている）に馴染みのない作業員や、そこで使われている機械（その発明にもたぶん分業が貢献したことだろう）の使い方に馴染みのない作業員は、最高の生産性を発揮したとしても、一日にほとんどピン一本すら作れないだろうし、どうがんばっても20本は絶対に無理だ。でもこの産業がいま実行されているやりかただと、この仕事全体が一つの業種であるばかりか、それがたくさんの作業に枝分かれしていて、その大きな枝もまた、一つの別個の業種になっている。一人が針金を引き出して、別の人がそれをまっすぎにして、三人目がそれを切り、四人目が先をとがらせ、五人目がてっぺんを研磨して針の頭がつくようにする。その頭を作るには、ちがった操作が三種類必要だ。その頭をつけるのも、独

自の作業だし、ピンを磨くのも別の作業だ。そしてそれを紙に挿すことでさえ、別個の仕事となっている。というわけで、ピンを作るという大事な仕事は、こんなふうにおよそ18個の別個の作業に分けられ、一部の製造工場ではそのそれぞれを別の人が行っている。中には同じ人がそのうち二つか3つをやることもあるけれど、この種の工場で小さめのやつを見たことがあるけれど、そこで働いているのはたった10人で、だからそのうち何人かは二つか三つの別個の作業を担当していた。でも、かれらはとても貧しかったけれど、そして必要な機械に無差別に習熟していたけれど、かれらは頑張れば一日12ポンドくらいのピンを作れる。一ポンドには中くらいの大きさのピンが、4000本以上含まれる。つまりこれら10人の人日とっては、一日4万8千本以上のピンを毎日作ることができるわけだ。でもかれら全員が個別に独立して働いて、だれもこの商売でことさら訓練を受けていなければ、だれ一人として一日20本以上は作れないだろうし、一本も作れない人もいるだろう。これはまちがいなく、各種の作業の適切な分業と組み合わせの結果として達成できているものの240分の1や、4800分の1ですらない。

その他のあらゆる技芸や製造業において、分業の効果はこの実に些末なものと同水準だ。ただしそれらの多くでは、労働はこんなに細分化できなかつたり、こんな単純作業に還元できなかつたりはするけれど。でも分業は、導入可能な場合には、あらゆる技芸において、労働の生産力をそれ相応に増大させる結果となる。各種の業種や雇用の相互分離は、この利点の結果として生じたもののようなのだ。またこの分離は、最高度の産業と改善を教授している国々において、一般に最も進んでいるようだ。社会が野蛮な状態においては一人の作業が、もっと向上した社会においては、一般に数人がかりの作業となる。多くの先進的な社会では、農民は普通は農業だけに専念し、製造業者は製造業以外には手を出さない。どんな製品であれ、一つの完成品として生産するために必要な労働も、ほとんど必ず多くの人々に分割されている。リネンやウール製品の各部門では、いくつものちがった商売が雇用されている。綿花や羊毛を育てる人々、リネンの漂白とsmoothers、布の染色や仕立てを行う人々まで！ 農業は、確かにその性格からして、製造業に比べるとこれほどの労働分業が可能ではないし、各仕事同士をここまで完全に切り離すこともできない。grazierとトウモロコシ農家の仕事を、大工が通常鍛冶屋と区別されているのと同じようには完全に分離できない。紡績業者は、ほぼまちがいなく布を織る業者とはちがう人物だ。でも耕やす人、畝を作る人、種をまく人、トウモロコシを取り入れる人は、同一人物であることが多い。こうしたちがった種類の労働機会は、一年の季節ごとにめぐってくるので、ある一人の人物が、年中このどれかの作業だけに雇われるのは不可能だ。農業において使われる、各種のちがった労働分野をすべて完全に分離できないということが、この分野における労働生産力の向上が製造業での向上に追いつかない理由なのかもしれない。

最も裕福な諸国は、確かにその近隣諸国と比べて、製造業でも農業でもはるかに高い成績をおさめている。でも、その格差がどちらのほうで大きいかと言えば、農業よりはむしろ製造業のほうだ。かれらの土地は一般に耕作状態もいいし、労働や費用をかけているので、地面の広さや自然の肥沃度から見て大量に生産する。でもこの生産量の優位性は、その労働と費用のかけ具合の多さとほとんど比例する程度に毛が生えた程度のものでしかない。農業では、豊かな国の労働は、必ずしも貧困国に比べそんなに多いわけではない。あるいは少なくとも、製造業で普通見られるほどの生産力の差を見せることはほとんどない。したがって、豊かな国のトウモロコシは、品質が同じ程度だったとしても、貧困国に比べて必ずしも安い値段で市場に提供されるわけではない。フランスはポーランドに比べて豊かさや進歩の面で優れているけれど、でもポーランドのトウモロコシは、品質が同じだとしても、フランスのものと同じくらいの安さだ。フランスのトウモロコシは、トウモロコシの生産地では、イギリスのトウモロコシと品質ではまったくひけをとらず、そしてほとんどの年では値段も同じくらいだ。でも豊かさや進歩の面で、フランスはイギリスより劣っているだろう。イギリスのトウモロコシ畑は、フランスよりも耕作状態がよいとされ、フランスのトウモロコシ畑はポーランドのものよりはるかに耕作状態がいいとされる。でも、貧乏な国は耕作状態が劣っていても、一部の尺度、たとえばトウモロコシの安さや品質において、豊かな国と張り合えるのに、製造業の製品ではそんな競争ができるようなそぶりすらまったく不可能だ。少なくとも、そうした製造業が、その豊かな国の土壌、気候、状況にふさわしいものであれば、フランスの絹はイギリスのものよりも品質がよくて安い。それは絹の製造が、少なくとも現在の生糸輸入の高い関税のもとでは、フランスに比べてイギリスの気候には適していないからだ。でもイギリスのハードウェアと硬い羊毛は、フランスのものとはあらゆる点で比較にならないほど優れており、品質が同じならずと安い。ポーランドではほとんどどんな製造業者もいないそうで、例外的に、それなくしてはどんな国も自給自足できないようないくつか粗悪な家内制手工業があるだけだとか。

分業の結果として、同じ数の人々がこなせるようになる仕事量の大幅な増加は、三つのちがった条件に依存する。まずは、個別の作業員それぞれにおける技能の増大、第二にある種の仕事から別の種類の仕事に移る時に通常無駄になる時間の節約、そして最後に、労働を支援して補い、一人が多人数の仕事こなせるようにする、大量の機会の発明だ。

まず、作業員の技能増大はまちがいなく、その人物のこなせる仕事量を増大させる。そして分業は、各人の仕事をたった一つの単純な作業に還元してしまい、その作業だけが人生で唯一の仕事にするので、その作業員の能力をまちがいなく大幅に高める。普通の鍛冶屋で、金槌の扱いには慣れていても釘を作ったことのない者がいるとする。それが何かの

拍子に釘を作ることになったら、一日 200 か 300 本以上の釘は作れないだろうし、できた釘も劣悪なものとなるのは確実だろう。

訳者あとがき

はじめに

これはアダム・スミスの『An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations』の全訳(になるはずのもの)だ。いわゆる「The Wealth of Nations」、国富論で、原著は1778年に出てから、1780年代を通じて何回か改訂されている。底本としては、特に決まったものではなくて、Penguin Classicsのものを使ったり、Dover版を使ったり、ネット上にあるものを使ったり、いろいろだ。特に底本を限定しないのは、ぼくが目指しているのがそんな厳密な代物ではないからだ。そういう書誌的なことをこちゃこちゃ研究している人は、原文をさがして読めばいい。こんな翻訳なんかに頼ってるんじゃない！ぼくは、初版と第二版とで多少の加筆があろうがなかろうがどうでもいい普通の人を対象にこの翻訳をしている。いろんな版をみて、そういう人がいちばん興味を持ちそうなところ、興味をもつべきところを考えて訳している。

題名と翻訳について

さてこの本はもちろん経済学の古典だ、というか、この本で経済学がはじまったようなものだ。だから、これは何度か訳されているのだ。が……それらの翻訳の多く、日本の歳寄りたちの、理解しがたい風習にとらわれている。

Nation というのを「国民」と訳す、という変な風習だ。

たとえば岩波文庫ではこの本は「諸国民の富」という題名になっている。Wealth of Nations で、Nations を諸国民と訳したわけだね。

ところが序文をちょっと読んだだけで、本書 Wealth of Nations の題名に出てくる「Nations」というのが国のことであって、国民のことではないというのはすぐにわかる。「諸国民の富」というのは、だからタイトルからして明らかにまちがっているんだ。

たとえば冒頭の一文。

The annual labour of every nation is the fund which originally supplies it with

all the necessaries and conveniences of life it annually consumes.

さて、もしこれが国民なら、どうしてスミスはこれを it という非人称の代名詞で受けるの？

Whatever be the soil, climate, or extent of territory of any particular nation...

土壌や気候や領土の広がりって、個々の国民については言わないでしょう。うちの庭の気候なんて考えないでしょう。スミスは農業者だけを考えているわけ？ そんなわけはない。この直後の有名なピンの分業から見て、この人は農業者以外の人を念頭においている。

The policy of some nations has given extraordinary encouragement to the industry of the country.

この Industry of the country って農業のことだけれど、国民が農業振興策をする？ 国に決まってるでしょう。

というわけで、自然に考えればこの nation は国なんだ。でも既訳は、これをどうしても国民と訳さなきゃいけないと思いこんでいるもので、すっごいこじつけをする。「国民の気候」とか平気だし、国民が一人で農業政策したりする。途中でおかしいと思わないのかな。思わないらしい。

文脈より自分の勝手な思いこみを優先させる。中身をきちんと読んで理解せず、平気でねじまげる。そういう翻訳方針で、まともな訳になってるとはぼくはとても思えないな。実際、『国富論』の邦訳は、別宮貞徳の欠陥翻訳シリーズに取り上げられるほどの代物だった。あのシリーズは、一ページに本質的なまちがいが10箇所はないととりあげないからね。ちなみにそのとき、なにやら訳者の弟子らしき学者が出てきて、「いや、あれはあれでいいんだ」と強弁してまわっていて、呆れ果てたなあ。文中で、「一軒の家はどう転んでも一軒の家だ」という強調で、「A house」と書いてあるのを、訳者が「A型住宅」と訳して別宮貞徳に「プレハブ住宅じゃあるまいし」とバカにされていたんだけど、そいつは「いや、当時もそういう大量生産住宅があったかもしれない」とかなんとか。いやあ、恥も知らなければ、学者としての最低限の学問的良心もない、年寄りのご機嫌取りと提灯持ちだけのクズがいるんだね。

どうして日本のとしよりは、nation を「国民」と訳するのが好きなんだろう。アメリカのとっても有名な映画に Birth of a Nation というのがあって、D. W. グリフィスの大作なんだけど、これの邦題が『国民の創生』というのだ。なに、国民の創生って？ 意味不明

でしょう。この映画はアメリカが独立してリンカーンが演説して、というアメリカ建国映画なのだ(ただし後半になって、いきなり KKK 翼賛黒人バッシング映画になってみんなひっくり返るけど)。だからこれは当然、『ある国家の誕生』というのが正しい訳なのだ。でも日本の映画ヒョーロンカはこれを『国民の創生』と表記しないと、無知とかなんとか言ってせせら笑ったりする。この邦題がおかしいと指摘できないテメーらのほうがアホだ。

この本の意義

さて、この本の意義は.....きかなきゃわかんないようなら、かなり困りものなんだけれど.....

えー、この本はさっきも書いたとおり、経済学というものを創り上げた一冊だ。現在のあらゆる経済学は、すべてこの本を根底に持っている。冒頭に出ている分業の重要性、そして何よりも、需要と供給をマッチさせる見えざる手、といういまの市場経済の根幹をなす考え方を、アダム・スミスはこの一冊で確立した。経済学っていうのは、すべてこれをベースとしつつ、ときにこの見えざる手がうまく機能しない場合についてあれこれ議論している学問体系だと思ってまちがいない。いわゆるミクロ経済学は、ほぼアダム・スミスの枠組みの中にある。

マルクスはそこで、生産力がガンガン上がって供給関数という考え方が成立しなくなったときのことを考えた。同時に、労働という特殊な商品の特殊性について考えた。それは人間という存在を考えるとときには大事なんだけれど、でもスミスの枠組みの中の、特殊ケースでしかない。ただそれは、個人レベルで見れば、どうしてもゆずれない最後の線だ。これ以下の値段ではおれが生きていけないという最低ラインがあって、それをどう確保するかがあるときには死活問題になる。だからある時代の労働者にとって、マルクス経済学は最後の砦となって、一時あそこまで世界を席卷したわけだ。実は、この供給関数が成立しない世界と、労働の話の部分とは、ぼくは必ずしも整合性があるとは思わない。それって実は、だいじなんじゃないかと思うんだけど、これはいずれまた考える。

ヴェブレンはそこで、金持ちは消費を見せびらかすのが目的だから市場は成立しないよ、という話をした。これもまた特殊例だ。シュムペーターは、創造的破壊とか言ってかっこいいのでもてはやされる。でも、それは結局、スミスの枠組みは必ずしも固定なものではなくて、時代とともに変化していくよ、と言っているわけだ。あとはだれだ。いろいろいるけれど、みんなスミスの基本的な考えを精緻化したり、数式をつかって明快にしているだけなんだ。

唯一、ケインズだけがスミスに匹敵する新しい考え方をつくった。個人レベルではスミスは正しいけれど、社会全体として考えたら、需給がマッチしない場合もある。そのとき政府の公共投資や財政政策が意味をもってくるという、いわゆるマクロ経済学の枠組みだ。

この訳の意義

いや、本来であればいまさらこんな訳がでる意義は皆無のはずなのだ。岩波文庫や中公文庫ですら高すぎるというケチな連中が、ダウンロードして1000円ほど得した気分になってうっしっし、というその程度の代物であるべきなのだ。

ところが冒頭でも述べたとおり、既存の国富論の訳は、題名からして誤訳をさらけだし平然としている、恥知らずの代物だ。中公文庫も五十歩百歩。この経済学の基礎中の基礎の代物に、まともな翻訳がないのだ。したがって、それをまともな形で訳して紹介することには重大な意義がある。昔はまともな訳があったかもしれないけれど、ここ20年ほどはなかった。いま、多くの人にとっては初めて、『国富論』がまともな形で提供されることになる。

日本の経済学界は、それでも平然としている。冒頭でも述べた通り、既存の翻訳のダメさ加減については、別宮貞徳がビシビシ指摘を行っている。でも、それをきちんと受け止めて、まともな訳を出そうというだけの気概も良心もないわけね。

もちろんいまさらアダム・スミスでもないでしょう、という気分はあるのかもしれない。不均衡動学のこの時代に、

ちなみにぼくは、マルクスだってまともな訳になっているとは思わない。代々木に巣くってるあの連中が、党の方針に従ってマルクスの著書の翻訳をねじまげている話は、金塚「オナニー」貞文訳の『共産主義者宣言』解説に書いてある。